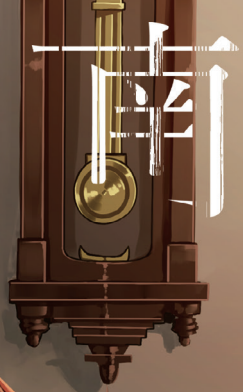


7 6 5



顧

雲

録

来

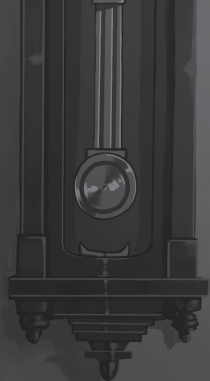
れむれむ

[Illustration] 十朱みかげ

なぐもしおり ビオグラフ
南雲栞の回顧録

れむれむ

Illustration / 十朱みかげ



目次



あとがき

エピソード

4
美しい鬼

3
夜の女たち

2
種を蒔く人

1
彼女の部屋

プロローグ

166

160

123

80

42

5

3

プロローグ

「あたしが王子様になってやるよ」

物の弾み、気の迷い、あるいは神の導きだったのか。衆人環視を物ともせず、堂々と胸を張り、そう高らかに宣言する。

学芸会の演目は白雪姫で、彼女は紛れもない悲劇のヒロインに抜擢された。行き過ぎたお父さん子で通っていた峯雲環みねぐもたまきの相手など、誰一人として引き受けようとはしない。仕舞いには口々に、パパに王子役を頼めばいいのにと揶揄やゆされる始末だった。

その親子仲の良さと況いはんや、日々顔を合わせる学友の名前すら覚えようとしないうあたしが知っていたほどだ。

クラスでの彼女は無口で、でもって四六時中そわそわしていて。ぱあっと明るい表情を見せるのは、

帰りの会が終わって教室を後にする瞬間だけで。
帰ってこれから遊園地にでも行くのか、と訊いた
隣席の少女に

「ううん。パパのとこ帰るの」

満面の笑みでそう答え辟易へきえきさせた程度に、彼女にとっての中心は父親だった。

ちなみにその時ドン引きしたのは、産まれて初めて愛想笑いを使うしかなかった隣席の少女は、外でもないこのあたしだ。

不思議で、理解できなくて、とどのつまりは変わり者で——他の子と違うことは、即ち悪で。そういう文化圏に育った少年少女は、至極当然、事あるごとに彼女をからかった。

それでも比較的穏やかな校風だったせいとか、お互いにまだ幼すぎたからか。無垢な少女に傷を負わせるほどの行為ではなかった。勿論、心にも体にも。だから放っておくこともできた。現に知らぬ存ぜぬでいた。だったら、なんであたしはその時に環を

庇^{かば}ったのか。変人すぎる隣席の彼女に感化されてしまった？

——本当のところは、そっちのほうが楽になれるから乗っかっただけだ。あたしはあたしらしく生きたい。寮も着替^かえも、場合によっては授業も、いつの日からか別^わけられるようになって。だれより疾^{はや}く走ってだれより高く跳んでも、女の子という括^{くわ}りに閉じ込められて。なんとなくそれが性に合わなかった。自分らしく振る舞える大義名分が欲しかった。

……と、格好付けてみたところで。傍^{はため}目にも環が可憐な少女というのは厳然たる事実であつたし、彼女へのイジメがイジメと呼べるほど陰惨なものに発展しなかったのもそれが一役買っていたのは周知の事実であつたし、話を本筋に戻せば配役的にも決まりそうだなと思わなくもなかったし、頑丈で長身なあたしと華奢^{きゃしゃ}で小柄な彼女が並べば本番で父母からのスタンディングオベーション間違いなしだ。そう考える乙女心と下心も僅かにあつた。

彼女のことが好きだとか嫌いだとか、愛していないといった話ではなく、自分が格好付くかどうかというただ一点で。

「環がお姫様で、あたしが王子。文句ある？」

一切合切が自己満足のつもりだった。

あたしの中の南雲^{なぐも}葉^はが始まることになるまで。

時は巡って劇の当日、カーテンコールを待つ舞台袖。文字通り背伸びした彼女に襟を引かれ、唇を盗まれる瞬間までは。

何も特別ではなかった少女が、だれかにとつての特別になろうとした日。

あたしは環の手を引いていた。

うつすらと霞みながら、それでも色褪せず輝く記憶の中。

全ての始まりを始まりと意識することもなく。

1 / 彼女の部屋

それからまもなく両親が死んだ。

ある晴れた昼下がり、同じ時刻に別の場所で死んだ。

要するに他殺^{こころ}された。

証拠はなかった。

幼心に理解したのはそれくらいで。

もし犯人が判ったなら、そいつを殺^やるためだけに人生を使い切ろうと思った。

浅い霧に白んだ山の稜線を見上げながら、人気のない山道を直走る。ペース配分など気にしない全力で、股が割けそうな目一杯のストライドで、急勾配の坂を駆け上がる。背負った登山用のリュックが弾

むたび、仰向けに転びかねない衝撃が両肩を襲う。下っ腹に力を込めて前のめりに、重力に逆らいながらもアスファルトを蹴る足を止めはしない。

朝の日課の、そのまた最初のランニングが終盤に差し掛かる頃。恐怖から命からがら逃げ出す者のような醜さになる。

そうでなければ意味がない。苦しくない、健康維持のためのトレーニングなど老人のやるものだ。

負荷に全身の筋肉が軋み、絶え間なく循環する冷気に呼吸器が縮んで、酸欠で視界が明滅する頃になつてようやく——この身が石膏や陶器で出来た借り物でないことを知る。

限界の先、あの世に手が届く位置まで追い込んでようやくと、ぎらぎらした生の実感を得る。

それが生まれ付いての絶対的な快感だった。

ごつい身体を商売道具とする仕事柄、ナルシストの誇^もりは免れないと思う。が、決してマゾヒストではない。他人に虐^{いじ}められるのは最上級の不快で、そ

の反対は——とそんな性癖の話をしてても仕方がない。立派な体格に産んでくれた母を誇りに思っているし、性差など義務教育の刷り込みだと言わんばかりに地獄の特訓で基礎から鍛え直してくれた父には感謝している。

スポーツマンというより、脳筋という表現が適切な、どこにでもある普通の女の子として育った。

“自分を普通と言いつける輩は絶対信用しちゃダメっすよ”

と昔の同僚は語っていたが、それでも今では随分まともになったものだと感じる。

幼い日の微笑ましい思い出——一種のトラウマにより、女の性^{せい}を捨てようとした時期もあった。

第二次性徴が始まり、乳と尻が膨らんでお赤飯を炊く日が来るまでは、努力次第で男の子になれると信じて疑わなかった。女よりも強い生き物だからという単純明快な理由で憧れた。別にだれかの王子様になろうとしたわけではない、本当だ。

毎朝こうして己を酷使するのも、おそらくは古い夢の名残だった。

当時の思い込みはあらゆる間違いに満ちていた。

まず一つ、女の子は男の子になれない。初等教育をもう少し真面目に受けるべきだったと今は反省している。二つ目に、男より強い女はいる、あるいはそうなることができる。あたし自身がその証明だ——と言いたいが、意外と珍しいものではないと後に知った。少なくとも今の職場にはそういう女がいる。いい女だ人間^{けいよう}か化生の者が怪しい、そんな奴が。

山頂の、展望台と言えば聞こえは良い、自販機と公衆便所のみが鎮座した原っぱに到着する。

米俵いくつ分か考えたくもない、ただただ重石としての機能性に特化した金属が鯨^{すし}詰め^{すしめ}の荷を下ろせば、約七十キロの自重が羽毛一枚ほどに感じられた。身軽になった体で、長く険しい石段を三つ飛ばしで抜けたなら、そこが明道寺^{みょうどうじ}——今のあたしが所属

する組織の本殿。寺と言いつつ入口には図体のでかい鳥居があり、今では完全に神社としての体裁だったが、昔はどうのこうの……とここへ来た頃に説明されたが覚えていない。早い話が京都の山奥にある古い社だ。

「遅いぞ、葉」

「うっせえ。あたしはガキの頃から朝が弱いんだ。布団が寒い寒い朝に、二度寝もさせずにテメエの都合で引つ張り出した落とし前がどれだけ高く付くか分かって言ってるだろうな？」

「もう少しマシな嘘を吐け」

相手は呆れたように眉を寄せつつも、あたしの縫^よれた襟元に手を伸ばす。

タイに指先が触れるか触れまいかのところまで迫って、乱暴にそれを引つ掴んだ。

「あたしの領空権を侵犯するとは、見上げた度胸だな？」

「寝言を垂れ流す前に身嗜みを整えろ」

「テメエには関係ねえ」

「はあ。どうしておまえは四六時中喧嘩腰なんだ、疲れないのか」

「なんつーか、落ち着かねえんだよ。あたしらは昔からこうだったろ」

コイツの名は帝^{みかど}。明道寺のドンである神主御用達の懐刀であり、ただ一人の女護衛。昔はあたしと二人で組んでいたが、配属が衛士^{えいじ}とやらに変わってからは衣食住を共にすることもなくなった。今朝のうに時たま屋敷へ呼び出しては、厄介事を押し付けてくる疫病神だ。

「で、用があるならさっさと済ませろ。あたしはこの後も午前中ずっと筋トレなんだよ」

掴んだ帝の右手を振り払い、「布団で二度寝じゃなかったのか」「ぶん殴るぞ」といった打々発止^{ちようちふし}の後、彼女は本題を切り出した。

なんでもない、拍子抜けするほどいつも通りの依頼を聞いて踵^{かかと}を返す。

「先言ってくれりや、朝飯前に済ませてきたもんを。また麓^{ふもと}行きか」

「こんな朝早くだ、向こうも営業時間外だろう」

「だからだよ。女は寝込みを襲うのが一番いい」

「……その言葉遣いは、もう少しなんとかならないのか。私に限らず、おまえと対面する相手は皆災難だな」

「めんどくさい挨拶はなし。顔を見る前に済ませれば、それでいいんだろ？」

「礼儀を弁えて、後始末は忘れないようにと燈^{あかり}様が——」

「退職した鬼ババアの話なんて知るか。じゃあな」

「ああ、気を付けて行ってこい。それと早く帰ってこい」

「テメエは何様だ。あたしのオカンか」

背中に小言をぶつけられながら元来た道に戻る。まったく、本来なら帝の用だというのに他人を借

り出しておきながらあの態度だ。既に慣れっこだったが、そんな我が儘に応えるのは菩薩^{ぼさつ}のあたしくらいだろう。

展望台に戻り、さつき投げ出したリュックから必要な品だけ取り出して、前を全開にしたブレザーの内ポケットにねじ込む。あたしにとっては無用と思えても、帝の顔を立てるために、面倒だがわざわざ携帯しているものだ。

いつもの仕事をいつも通りにこなしたら、彼女に会いに行こう。

日が昇っても、休みの今日は布団の中で微睡^{まどろ}んでいるに違いない小さな彼女に。

先にシャワーを浴びていくべきだろうか。汗の匂いは、この後きつと上書きされてしまうだろう。鮮烈で濃密な、朱^{あか}い鉄の香りに。

——なんの因果か、命の恩人であらせられる帝の頼みで。

今のあたしは、今もあたしは。

あの頃と変わらず人殺しをやっていた。

嫌々ではなくいいよ天職だと思っている、本当だ。

死が人を引き寄せるというのは本当らしい。

両親が死んだ翌日。茶毘^{だび}が終わり、黒尽めの親族たちが散り散りに火葬場から去って行く中、母方の伯父から今後のことを聞かされた。何年か会っていないくせにやけに親身に、同情心を貼り付けたような顔で話すのがなんとなくに入らなかった。

葉を含む遺族、南雲五姉妹は伯父が引き取って養育すること。長女の葉と次女の梓^{あす}は今まで通り学校へ通い、歳の離れた小さな妹三人は伯父の妻が面倒を見て、今後の生活なら何も心配しなくてもよいこと。……もう一つ話すべきことがあるだろうと思うたのに、伯父の話はそれだけだった。大人はいつも

肝心なことをはぐらかすのだと知った。

あたしの通う学園は、意外とお嬢様学校らしい。

小学校からエスカレーター式の、前科が付いて放校にでもならない限りは卒業まで一直線の、山の裾野にある女子校だった。とは言え、別段学力レベルが高いわけでもなく、要は地元のボンボンが通う私立校。学費を一括払いで、嫁に行こうが社会に出ようがご自由の真人間が一丁上がりという寸法だ。妹の梓は頭が切れるので、あたしとは別の公立校に通っていた。訃報を聞いて、病院にやって来た彼女を見ての一言目が「梓、背伸びたな」だった程度に久しい再会だった。

南雲家は、両親と梓と下の妹三人の在所だった。以前は母方の実家で暮らしていたが、あたしが寮に入るのに合わせて、梓の学校に近いマンションへ移り住んだ。府内の一等地、それもピッカピカの新築をキャッシュで購入。中流かそれ以上の収入があったのだろう。今思えば、堅気の親父ではなかった気

もする。祖父母の住む実家も、子供時代にはよく迷った広い庭付きの屋敷だ。代々金持ちなのだろう。伯父の家は戸建ての借家だったと後に梓から聞いた。寮生だったあたしの生活は微塵も変わらなかった。

毎朝早起きして離れた学校へ電車通学は大変だ……と梓は受話器越しに嘆いていたっけ。どうして元のマンションから通わないのか不思議だった。

「父さんと母さんが死んだのに、アネキは悲しくないの」

「別に。なんで悲しがるのさ」

「普通悲しいよ、親が殺されたら。毎日泣くのが普通だよ」

「あたしは泣かないな。人間死ぬときゃ死ぬ、それはあたしや梓もおんなじだろ？」

法事の度に泣き言を並べていた梓だったが、四十九日で会う頃には悲しみも薄れたようだった。単に押し隠しただけかもしれない。負けず嫌いなと

ころだけはあたしに似ていたから。

あたしにとっても両親は大きな存在だった。そんなことは当たり前だ。

日頃会っていないくとも、急にいなくなったら悲しいに決まっている。梓と違うのは、なんの証拠も残さずなんの遺言も残せず、簡単に殺されたことへの腹立たしさが勝って泣けなかったことくらいだ。あれだけ常から油断はするなと語っていた豪傑の親父が、無傷のまま眠るように死んで霊安室に寝かされていた光景は、一生脳裏から消えるはずもない。

それでも時は待ってくれなくて。年が明けて進級の頃になると、梓も電話で両親の話を口にするとはなくなった。話題と言えば、勉強がづらい課題が終わらないという学業の悩みで、天才型ではなく努力家の梓は人並みに苦労が多いらしかった。

元は母に勧められて通い始めた学校も、どうやら卒業する気はあるようで、進学も見越してこれからが踏ん張りどころのことだった。赤点という概念

すらない女の園に住むあたしは、適当な相槌を打つのが精一杯だった。

夏休みもまもなくという七月の初め、伯父夫婦が死んだ。

平日の日中、子供は全員学校に出ていて、二人が残った借家は全焼していた。黒焦げに見えても死因は洗い浚い暴かれてしまう。伯父は薬物服用後の縊死……つまりは首吊り、伯母は頭蓋骨陥没による脳挫傷。よくある無理心中ということで決着した。

手に余る物を手に入れてしまった故の慢心。

目が眩むほどの遺産を使い込み、新築マンションまで抵当に入れて一世一代の大博打を打った顛末と懺悔を記した遺書が、寮のポストに届いたのはその翌日。

死が死を引き寄せるというのも本当らしかった。

「南雲葉さん。……南雲さんは欠席、と」

「んあ」

「んあ、じゃありません！ 出欠を取っている時くらいしやんとしてください」

「……あーい」

時代が時代ならチョークが飛んできそうな剣幕に、胸から上を机に伏せたまま顎だけを上げた。夢の中へ片足を突っ込むどころか肩まで浸かっていた意識が、朝のホームルームへと引き摺り戻される。

眩しいほどに教室を照らす蛍光灯、教鞭で黒板を打ちながら睨んでくる妙齢の女教師、くすくすと笑う周囲の級友たちも全てがいつもの風景。

一通り点呼を終えると、ぴりぴりした空気と後ろで結った髪を振り撒くようにして担任は教室を出て行った。ストレスはお肌によくないぞ、くらげちゃん（担任の安芸津海月のあだ名）。

「しおりん、また寝てる」

「おつ。環っちおはよ、元氣？」

「元氣」

「あたしも環っちの顔見たら元気出たわ。学食、一緒に行くか？」

「まだ一時限目も始まってない……」

「早弁ってやつだな」

「しおりん、お金持ってる？」

「ツケで大丈夫だって。おばちゃんも出世払いでいって言ってるし、環っちの分は奢るから」

担任と入れ替わりで隣のクラスからやってきた少女は、困惑の表情を浮かべる。

峯雲環。いつぞやの学芸会からこっち、親鳥について歩く雛のようにあたしの後ろをちょこまか付いて回っている子分一号だ。

「子分じゃない」

「ならなんだよ、押し掛け女房か？ ま、あたしはそれでもいいけど。環っち可愛いし」

「しおりん、やめて」

「……そんな本気で嫌がるような顔すんなよ」

「本気で嫌」

拗ねる環に適当な託びを入れると、ちょうど一限目の予鈴が鳴った。自分のクラスへの戻りしな、首だけをこちにに向けて彼女は訊いてくる。

「最近、休みがちって聞いたけど。しおりん、大丈夫？」

「んー、あたしは健康そのものだけど。どっちかと言えば、元気すぎて困るくらいだな」

「それは知ってる。中間テスト、もうすぐだから」

「あー……。今回も頼む、この通り！」

もう、と膨れた彼女とアイコンタクトを取って別れる。テスト勉強の申し出なら本来あたしのほうが出すべきだったが、親友の誼で環はいつも助け船を出してくれていた。

となると、今週の放課後は学校に出ねばならない……放課後は。

一時限目の国語教師とすれ違つて、あたしは体力温存のため一路保健室へと向かった。

伯父の一件以後、寮を出て自宅から通うようになった。

梓の通う学校を挟んでほぼ中央という絶好のポジションにある、風呂トイレ別の優良物件。二畳の台所に六畳の和室という、姉妹五人暮らしには狭すぎることを除けば……肝心の風呂は狭くトイレは歴史ある和式なことに目を瞑れば、それはもう十二分に快適と言える我が家。

「あ、アネキおかえり。今日も遅いね」

「聞いてくれよ、梓。環っちと放課後の秘密のレッスンが想像以上に長引いて……」

「日付が変わるまで、可愛い妹に帰りを待たせた言訳がそれ？」

今朝方のどれかのように食卓に伏せながら、制服姿の彼女はじっとした視線を向けてきた。

「冗談冗談、ごめんって」

「ほんとに？ 一度も会ったことないけど、アネキ

の話聞く限りではどうもその環って人、まともじゃなさそうだけど」

「ま、あたしと付き合ってる時点でまともじゃないな」

「付き合ってるってどういう意味よ」

「ん？ そりゃ、今日みたいにテスト対策やつたり一緒に飯食ったりそういう……ははーん、梓、なんか妙なことを考えてんだろ」

「別にそういうのじゃないけど。勉強だったら私が教えるのに」

「年下の、それも妹の梓に教わるほどあたしのプライドは低くない」

「あら。学力は低いのにプライドだけは高いのね、お姉様？」

眼鏡のレンズを反射させながら唇を歪めて笑う、この可愛くない生き物が次女の梓。今のあたしにとって事実上の嫁と言っているいい存在だ。

「ご飯にする？ お風呂にする？」

「そ・れ・と・も」

「お湯さつき沸かし直したばかりだから、そのまま入ってね。私は先に寝るから」

「……へいへい」

梓の下の子は小学生だ。帰りの遅いあたしの代わりに、帰宅部の彼女が面倒を見ている。まだまだ危なっかしい年頃だった。

狭い脱衣所で汚れた服を脱ぎ、素っ裸で浴室に入ると待ちきれず湯船に飛び込む。

上段の熱湯、下段の冷水が二段構えで下半身を襲った。

「あつ、ごめん。追い炊きじゃなくて足し湯にしちゃったから混せて。そんじゃ、おやすみ」

「……………」

長時間待たされた仕返しにしても、少々行き過ぎていないだろうか。好きで遅くまで梓を一人にしているわけじゃない。あたしだって早く帰ってきたい、それでも女には事情というものがあるのだ。

「はあ……」

言い付けの通り、混ぜれば湯加減は悪くない。

一日の終わりは風呂に限る。膝を曲げて首まで湯に沈むと、そのまま眠りこけそうな心地よさがある。疲れを次の朝に残さないのがあたしのポリシーだった。

適当に行水を済ませて、首にバスタオルを掛けたまま裸で冷蔵庫の前へ。ラップに包まれた皿をレンジで温める間、体を拭いて湿ったタオルで髪を乾かす。ドライヤーを使うと皆が起きてしまう、それ以前にブレーカーが落ちる。

一人黙々と梓の手料理を口に運ぶ。決して上手くも旨くもないが、気持ちだけは受け取っておく、そういう毎日の食事。

どれだけ混ぜてもダメになる安いプロテインを牛乳で割って飲んでから、寝室である六畳間の襖をそつと開く。部屋は明かりが消えて何も見えない。うっかりだれかを踏まないよう、布団の端っこに

滑り込んで目を閉じる。

すぐそばに、温かく柔らかな感触があった。

「アネキ、服着て」

「風呂上がりは暑いんだよ。あたし体温高くてさ」

「露出狂の話はいいから。もう十一月だし風邪引くよ」

自分の布団を少しでも掛けるように、梓は蹣^{にじ}り

寄ってくる。間取りの関係上、小さな妹たちは一枚のこたつ布団、梓とあたしは一人用の掛け布団を共有して眠っていた。

「梓こそ風邪引くぞ。あたしと違ってバカじゃないんだから」

「心配ありがと。でも、アネキが寝込んで困るのは私だから」

あたしが布団の中にすっぽり入れば、向かい合った梓は背中が丸出しになる。それを知っていて忠告しているのに、今晚の彼女はどうにも押しが強い。

暑苦しいほど擦り寄ってくるので、半ば怒り気味

に押し退けた。

「あたしには要らねえ」

「……あつそ」

「なんだよ、文句があるなら言えって。あたしが寒くないのは本当だから」

「アネキはそれでも、私は寒いよ」

「だったらさ」

「なんでいつも、私の気持ちを分かろうとしないのよ。アネキのニブチン！」

大声で話せば妹三人が起きてしまう。そう叱るのは彼女の仕事なのに。幼児のように駄々をこねて、にも拘わらず梓はあたしに抱き付いて。

「……分かってよ、いい加減」

「おまえが素直じゃないのが悪いんだろ。別にあたしは悪くない」

「アネキ、私のこと嫌いなんだ」

何かを試すような台詞、悄気^{しよげ}た声を聞いていられなくて——夜目が利き始めて表情を見分けられるよ

うになった目で、見上げてくる梓を捉えた。

ぐずぐずしていたかと思えば、驚くほど意志の強い瞳。

「してよ、アネキ」

「バカ。変な声出すなよ」

「変な声なんて出したことないでしょ。アネキこそ、そんなんじゃないんだから勘違いしないで……つて、ちょっと苦しい——」

両の腕で肩を掻き抱いて、股で挟むように腰を引き寄せる。柔らかな梓のラインが、あたしの荒つばいでおぼこに合わせてふにやふにやと形を変える。

抱く度に実感する。梓はもう立派な大人の女だ。

「梓はこれが好きだもんな」

「知ってるならさっさとすること。これならアネキもあったかいし、一石二鳥でしょ」

あたしの胸に埋まりながら、鼻息荒く姉を叱責する。正直なところかなりくすぐったいが、ここで変なことを言えばまた変な勘違いを起こすのが梓と考

えて、大人しく同意しておく。

「ま、そうかもな。でも、梓、おまえ今年で何歳だよ？ あたしの二つ下なら……」

「べ、別に歳は関係ないでしょ？ それ言うならア

ネキだって……え、何これ」

「どうかしたか？ ——んっ」

ぐりぐり、と胸の先に鋭い感覚が走って思わず声を漏らす。

「アネキなんで乳首^た勃ててんの、最っ低！」

「梓がいじるのが悪いんだろ。さっきから鼻息も荒いし」

「いじつてないから！ 鼻息くらいでこんなになるってどんだけ敏感なの。アネキ、まさか環さんに変なことされてないよね？」

「環でもこんなことするか！」

「でも、つて何よ。こんなことはしなくても、そんなことやあんなことはしてるんだ？」

根も葉もない嫌疑を吹っ掛けてあたしを困らせる

のはいつものことだが、言い争いをしている間、ずっと右手で弄ぶのはやめてもらいたい。あと潰すな、痛い。

「アネキの乳首が開発されてるのはよく分かったから。口で素直になれないなら、今度からは私の言葉に賛成なら勃てて、反対なら陥没させて」

「あたしの乳首はモールス信号じゃない」

一発殴って黙らせようかと思うほど生意気だった。

「元はと言えば、あたしの帰りが遅いなら先に寝てれば良かっただろ？」

「アネキ、今日も鍵忘れてたし。ドア叩かれたらお隣さんにも迷惑だし、みんな起きるし」

「電話しろよ。あたしはケータイ持つてんだから」

「う、それはそうだけど……そうだけどさ。……つて、ああもう、なんでアネキは」

そして再三の癪癪^{かんしゃく}を起こしそうになる梓。

流石のあたしもそれには面倒臭くなって、ついに

は痺れを切らして——見ていられなくて、それでもそんなところが愛おしくて。

「大人しくしろ、バカ」

左手で後ろ髪を撫ぜ、右手で浮いた肩甲骨をなぞり、額に口づけをして、梓を黙らせる。

「ガキのままでいいんだよ、おまえは」

「……アネキ、怒った？」

「怒ってねえ」

「怒ってるよ……。でも、嬉しい」

利口なふりをして、常識的な態度や誠意を求めているようでいて、実際は単純な奴だと思う。

「怒ってないから、本当のこと言え。あたしたち、兄弟だろ？」

「姉妹だから」

「そんなちっせえこと言ってんじゃねえ」

「小さいことじゃないよ。私とアネキは姉妹、まだまだ夢見がちな女の子同士」

一丁前に口を利くくせに、本当はいつだって姉か

らのご褒美を欲しがっている、都合のいい時だけ妹
ヅラをする憎たらしい女。

「ほんとだね、アネキと二人で話したかった」

「違う。聞いてもらいたいだけだ。あたしが一方的に、
梓の泣き言を聞くだけだ」

「ごめん。私、いつも弱くて」

「いいから話せよ。今のあたしに出来んのはそれく
らいだから。でも、朝までには終わらせろ。あたし
も眠い」

「うん。……あんがと」

実際にあたしは疲れていて、梓が必死に話してく
れたところで真面目に聞くつもりもなければ聞いて
いる余裕もない。今日の話だって、明日には何割覚
えているか分からない。

「おかしいよね、こんなの……。父さんも母さんも、
伯父さんたちもみんないなくなってる」

「オッサンは自業自得だろ。あたしらの金まで使い
込んで、マンションまで盗みやがって、バチが当たっ

てざまあみろだ。最初に話した時からそうだと思っ
たんだよ。親父と違って、なんつーかこう、オーラ
がなかっただろ？ 普通のオッサンが普通じゃない
ことに手を出して火傷した……。って、真っ黒焦げに
なる必要はなかったけどさ」

「ふふ、そうかも。……そうだよな」

「だから、めんどくせえことは全部——」

「ふわ……」

「って、オイ。ったく、眠いんならウダウダ言っ
てないでさっさと寝ろ」

「うん、おやすみ。お姉ちゃん……。ああ、アネキ」

「言い直すなよ……。おやすみ」

けれど、梓の気持ちは百パーセント理解している。
姉としての南雲栞はそれでいいのだと、あたしは
あたし自身を赦すことにした。

眠った妹たちを起こさぬようこっそり抜け出し
て、真っ暗な時間帯の新聞配達。梓の作り置きした

朝食を胃に入れて、日が昇り始める前からの牛乳配達。とりあえず登校したら居眠りし、夕暮れからは工事現場か交通整理の肉体労働。時々深夜の警備員。雨の日も風の日も雪の日も、そんなローテーションが三百六十五日。

この歳で、なるべく割の良い働き口を選んだ結果そうになった。男だと言って面接を受けた時はしくじったが、歳のサバを読んでいる、ガキだとバレたらまずい仕事もある。

家には眠りに帰るのみで、梓以外の妹の顔は、最近あまり見ていない。

祖父母と一緒に住んでいた頃、父の書斎だった和室によく出入りしていた。当時のあたしは意外と読書家で、単に目に付くものの全てが新鮮だったのもあるが、暇な日は父の蔵書に齧り付いていた。

知らない国の、聞いたこともない流派の、見たこ

ともない格闘術が記された武道書。骨折など負傷時の手当、痛みに効く漢方など、数多^{あまた}の民間療法が記された医学書。筋骨隆々の男性女性が登場し、血管が浮くほどの厳しい筋肉を見せ付けてポーズを取った写真集……は母に取り上げられてしまった。兎にも角にも、古今東西の、あるいは著しく偏った本の山があった。

中でもよく読んでいたのは漫画だろう。よく本屋で見るとは違い、全体的に陰影が濃く規則正しい大粒の斑点（トーンと言うらしい）が印象的で、やたら文字が多かったのを覚えている。大きくなってから知ったが、それはアメコミの翻訳本だった。

作中の主人公は、だれもが羨む類い希な能力を手に入れて、なおもシビれるほどの正義感を持ち、孤独に悪と戦っていく。あたしの中では未だに、ヒーローと言えはあの頃に読んだ漫画に出てくるキャラクターを連想する。いつかこんなふうになりたい、と強さへの憧れを持った切っ掛けがその頃の幼児体

験だった可能性も否めない。

けれど、初めは持て囃^はされたヒーローも次第に悩みを持ち始める。全てを救ったつもりでも、一方で涙する善良な市民もいて、直接不満を訴える者まで現れ始める。この世には絶対的な悪など存在せず、突き詰めれば相克する正義と正義の衝突が争いを産んでいるのではないか。

そも、正義とは何か――。

ガキのあたしには早すぎた命題に違いない。けれど、悩みと痛みを背負いながら戦い続けるその背中に、幼心にも惹かれたのは真実だった。その感情は今も変わりはしない。

とは言うものの、現実には存在しないから漫画の中のヒーローは輝けるわけで。どれだけ鍛えて特注のスーツを着込んだところで自由に空は飛べないし、手から蜘蛛の糸も出せないと知るまでは案外早かった。

今のあたしに、人にない能力があるとすれば、そ

れは精々――。

「あのですね、南雲さん。先生は……」

放課後の生徒指導室。

安芸津海月、二十五歳独身……もとい我が担任は、聞き慣れた口調で説教を垂れ流していた。タバコを吸ったりヤクを打ったのが見つかったわけではない。付け加えるなら前者は否定しないが後者はやっていない。教室が駄目なら職員室でも一向に構わないが、わざわざここで話すのは彼女なりの配慮というやつか。

話は変わって。キングオブ御局^{おつぼ}の教頭に指導力不足を散々いびられて、腹痛で何度か早退した噂はかねがね聞いておりますよ。

可哀想なくらげちゃん、がんばれがんばれくらげちゃん。

「ちゃんと聞いていますか、南雲さん！」

「あいあい。それで、なんの話でしたっけ？」

「やっぱり聞いていないじゃないですか……。ですから、学習態度の話です」

「学習態度ねえ」

海月にとって頭痛の種の一つが、あたしの素行不良であることは認めよう。度重なる教頭のメンタルアタックによりストレス性の急性虫垂炎で数日入院した際は、彼女のいる病院の方角へ向かって、数珠を持って両手で拝んだものだ。その程度に申し訳ないとは思っている。

「先生は、成績のことはとやかく言いません……。いえ、あ、良いに越したことはないですが」

そうそう。こういう根が善人の彼女らしい浅はかな生徒への譲歩が、デス・オブ・キャプテン・教頭の地獄耳にジャストインして身を滅ぼすのだ。

「南雲さんにとって、学校はつらいところですか？嫌な場所ですか？」

「つらくも嫌でもないです。別にイジメられてるわけじゃないですし」

「なら、どうして真面目に授業を受けてくれないんですか。先生のことが嫌いなんですか？」

「くらげちゃんはよくやってると思う」

「くらげちゃんではありません、みつきです」

教師たちの間では、南雲葉は毎晩のようにろくでなし連中と夜遊びや火遊びやその他エトセトラを繰り広げ、梓以下四人の可愛い妹たちを放置し、日々放蕩の限りを尽くしている……。ことになっている。少なくとも海月にはそういう設定で通している。

真実を隠したいわけではないが、本当のところを話して信じてもらえる自信はこれっぽっちもない。

「はあ……。頼みますから、学校の名前に傷が付くようなことだけはやめてくださいね。非行や犯罪に手を染めるような子でないことは先生もよく分かっています。信じてますからね」

「その理屈で行くとあの教頭ってやばいんじゃない？ よく言うじゃないですか、アカデミックパラサイトでしたっけ」

るぞオラァッ！」

「ハラスメントです！ あ、でも確かにそうですね。再就職先も見つからず、こんな学園で十年近くも

キャリアだけ無駄に稼いでいるあの人に、パラサイトは言い得て妙かも……」

「くらげちゃんも言うようになったじゃん？ この調子でもう一杯呑もうか？」

「体育倉庫の裏に埋めますよ」

「おっ。生徒に対してあるまじき発言。教頭、助けて教頭ちゃん」

直後、目にも留まらぬ早業でA4のバインダーが顔面のセンター中央と真ん中に突き刺さる。

さすが剣道有段者でインターハイ出場経験ありの元スポーツウーマン。太刀筋が見事だ。メンタルさえ強ければ世界と戦えただろう。

「それでは。先生はこの後、職員会議がありますから」

「教頭ちゃんによろしくう！」

「……チッ、人が下手に出てると思つて舐めやがつてこんのクソガキや、オトナからかつてと血い見るぞオラァッ！」

「くらげちゃん怖い。キャラ、キャラを大事に」

そういえば時代外れもとい世紀外れのレディースだったという噂も以前聞いたことがあるような。クラスで悪戯鬼だった奴とウン十年後に同窓会で会うと、ムシヨでどんな恐ろしい福利と更生のプログラムを受けさせられたのかと戦慄するような真人間にしていることが往々にしてあるらしいが、意外とそういう感じかもしれない。

見たところ、海月はまだ道半ばの様子だが。

「望月先生、あとを頼みます」

「ああ、教頭君によろしくな」

「……そうやって先生まで私を虐めるんですね」

海月の後ろで待機していた相手は、彼女から先ほどのバインダーを受け取ると、選手交代とばかりに正面へ座った。微笑みとも慈しみともつかない曖昧な表情を浮かべ、潰れた矩形のレンズ越しに無言でこちらを見据える。

指導室の引き戸が閉まり、海月の足音が聞き取れなくなつてから、

「御機嫌よう。今日の加減は如何かな、葉君」

「元氣ハツラツ、死後数時間」

「それは結構。血色は良いようだ、硬直も始まつていない」

表情筋を全く動かさず、その女は声だけ笑つて義務的な挨拶を寄越す。

望月茉莉。あたしより立つ端のある女は、この学園内ではコイツ以外に見たことがない。校内で、ロングヘアーを揺らして歩くのつぼの白衣を見れば、ほぼ確実に茉莉だと断言していい。ただし、彼女は海月のような常勤の教師ではなく、市内の病院からカウンセラーとして月に何回か訪れている部外者だった。

張りがあつてほうれい線も出ていない整った肌は二十代のものだろう。同時に、深淵じみた双眸の底には、海月が倍の歳を刻んでも至れないであろう静

けさが澱のように堆積している。

「それで、だ。海月君も仰つていたが……君は聞いていないだろうが、姉として、妹君らを大事にしたほうがいいだろう。時間は有限、孝行したい時に親はなしと言つてだな」

「ダメエ、あたしの両親のこと知つてて厭味言つてんだろ」

「それは勿論。だから、家族との今を大事にしたまえ」態度も、その人を食つた口振りも、何かにつけて気に食わないがいつものことだ。医者やその類は偏屈ばかりと相場が決まつている。

あたしの怒りも無視して、茉莉の視線はカルテを滑る鋭いペン先に向いている。万年筆だろうか、ボディに刻まれた蛇が絡むような模様には金鍍金が施され、ぱつと見て値打ちのある品だと判った。

「さて。今日の私は、君に幾つか尋ねたいことがある」
「今日に限らず毎回質問しかしてねえだろ。なんだよ？」

バインダーを無造作に捲っていた茉莉だったが、何か愉快なものでも見つけたのか手を止める。下がったレンズもそのまま上目で、しかし顎を引いて見下ろすようにあたしを見つめる。

先に目を逸らしたほうが負けだ。なんとなくそう思えて、意地になって睨み返した。

時々、こうして茉莉の視線から逃れられなくなる。彼女も頑固なものだから、沈黙は時に数十秒にも及ぶ。

「初見で察していたが、やはり数字の上でも見事な体格をしているようだ。何か部活動を嗜んでいるのかな。バスケットかバレーか、はたまた……」

「そこにはなんて書いてある。知ってることをわざわざ訊くな。あたしだって暇人じゃない」

「無所属、帰宅部というものか。これが本当に暇人でない？」

「次に同じこと言ったら眼鏡ごと脳天から割るぞ」

「ふう……。栞君、暴力は良くない」

「テメエはあたしに心の暴力を振るってる」

「ごもっとも」

「……で、それがなんだよ。あたしが部活に入るように説得しろ、とかくらげちゃんに頼まれて鎌をかけるつもりなら、そんなもん通じないからな」

「ほう。栞君の勘の良さには感服する。あるいは、私と話す前に海月君自ら襦袢を出したか」

「なかなか鋭いじゃん」

「まあ、そういう分析を生業なりわいとしている。そんなことはどうでもいいとして」

実のところ、茉莉だけはあたしにとって唯一の不可解な相手だった。今怒っているのか笑っているのか分からない、虚像で作り上げられた実在。海月の依頼をどうでもいいと切って捨てる辺り、なかなかの食わせ者には違いないだろうが。

単純な悪人と決め付けるのは早計に思えた。善悪の二元で解釈する前提を捨て去っても、未だ彼女の本質には迫れていない。

果たしてそれは、限りなくクリアなのか、際限のない闇なのか。

茉莉と見つめ合い、妖しく揺れる瞳の底を覗き込む度に、いつも自問させられる。

——やはり彼女のそれは読めそうにない。

「これほど恵まれた肉体をしていながら、運動部に入らないとはなんとも勿体ない限り。この学園の……いや、人類の損失と言ってもいい」

「その紙切れにあたしの何を書いてあるんだよ」

「君の身体データ、体力測定の結果と、あとは……まあ色々だ。時に茉莉、私は君の可能性を探りたい。然るべきホスピタルで、一度と言わず精密検査を」

「絶対に行かない。あたしの体をなだと思ってる」

「強いて言うなら、我が唯一つの望みとでも言おうか。とどのつまり、可能性の——」

「もういい。御託は聞き飽きた、帰れ」

「やれやれ。私も甚く嫌悪されたものだ。今一度訊くが、病院は嫌いか」

「あたしは畳の上で死ぬ」

「結構。ならば、最後に診察をしよう。ここに右手を広げてくれ」

会話は暖簾に腕押し糠に釘といった具合で、これまでのカウンセリングとただ一度も変わらぬ未来永劫何億光年先まで続く平行線を辿っていた。大方最後は、意味もなく体を診察してお終いだ。伯父夫婦が死んでから半ば強制的に行われる茉莉との禅問答も、今日はここまで。

向かい合う彼女の左手が、あたしの手の甲に重ねられる。背丈に相応しい細長い指先が、あたしの肌の上で大蜘蛛のように蠢く。

そして有り得ない力が手首を捉えた。

目は思わず茉莉に捕まれた右手へ——違う、彼女が狙っているのは——。

「あ——ッ！」

右手を有りつ丈の勢いで引き抜き、無意識に背後へ半身を投げ出す。

頭から落ち、素っ飛んだ椅子が茉莉にぶつかりながら、指導室のドアまで騒がしく転がっていく。床で仰向けに、後頭部を壁に宛がいながらも視線は彼女を捉え、数秒の沈黙。

「茉莉、突然どうした。急に取り乱すなど、普段の君らしくないな。白昼夢でも見たか」

「……………」

声が出ない。息が継げない。

一体なんだこの感情は——。

今、コイツはあたしに何をしようとした？

産まれて此の方経験がない、だから、久しすぎて忘れていた。

触れた瞬間に身を切り刻まれるほどの恐怖。あたしは目の前の茉莉を畏れて、初めて彼女の片鱗を視認して、その剣呑さに飛び退かざるを得なかった。

「……先生」

「なんだ、茉莉。君が私を先生と呼ぶのは……そうだな、この部屋で初めて会った時以来だ。五百七日と十数分ぶりか」

「右手のそれはなんだ」

茉莉の右手には、つい先ほどまでカルテの上を忙しなく走っていた万年筆が握られている。

「なんで右手に握ってる。おまえ、左利きだろ」

それも逆手だ。廊下側の彼女は、窓側で座るあたしに右肩を向けて机に向かっていた。カルテは常に左手で書いて右手で捲っている。見慣れた風景を間違えるはずもない。

「私が学生の頃に流行っていたんだ。よくあるだろう。こう指の間をコンパスで、トントントンと。君があまりに不真面目だから、少し悪戯をしようと思っただけだよ」

「……嘘つけ」

対面の人間から不意に右手首を捕まれた時、普通は掴んでくる手を見て、それから何事かと相手の顔

を見返す。数瞬、運が良くで一瞬は反応が遅れる。その間、視界の左半分が死角になる。大きく弧を描いて飛んでくる右フックを認識し、左手で庇うなど無理筋だ。一度視線が逸れてしまったなら気付く前にやられる。首筋、左頸動脈を最初から狙いに来ていた。

確かに逃れられなかった。茉莉の右手は、その凶器は、最後まで白衣のポケットから抜かれることがなかったというのに理解した。

「ペンは剣よりも強し、と昔から言うだろう。君がいつも大事そうに腰から提げている玩具よりは役に立つ」

「……………」

「いつになく楽しませてもらったが頃合いか。今日はこの辺りで退散しよう。……君が私を視る時、私も君を視ている。努々忘れないことだ」

悠々と席を立ち、転がった椅子を拾うこともなくドアを引き、振り返って一礼もせず。最後まで背を

向けて、まるで敵意など微塵もないように。

掛かってくるなら掛かってこいとも語るように、茉莉は何事もなく去って行つた。

生徒指導室に一人取り残され、起き上がることさえできず、閉まったドアを見つめるより他ない。

初めて望月茉莉の色を読んだ。

毒々しいほどの朱に染まる、殺意の色。

空々しいほどの白に染まった、憐憫の色を。

あたしには生まれ付き感情が見えていて、それを読むことで育ってきた。

今日、初めて他人に色を読まれた気がした。

他人の部屋へ足を踏み入れるという行為は、一種の儀式めいたイベントに思える。

関係が進展して恋人の部屋を訪れたり、何か健全なモノが秘匿されていないかと息子の部屋を物色

する母親も、何某かの重さで他者の領域を侵している。

部屋の主が居合わせるとして、招かれるがまま座って狸の置物のようになる者がいれば、相手にとって不都合な何かを探しねっとり見回す下種もいる。したがって、プライベートなその空間へと招かれた時点で、相手から幾許かの信用を得ていると考えるのが普通だろう。わざわざ仲が良くもない相手を部屋に入れて、不安に怯えながらお茶をしようと思ふ変人なんてそうそういない……少なくともあたしはそう考えている。

ある日の夕刻。一人暮らし用に違いない、胡座を掻くと組んだ太股がぶつかって浮いてしまうようなミニチュアの円卓を挟んで、環と二人のティータイムを過ごす。

急な悪天候から屋外のバイトがお流れとなり、これでは近所の公園で体力作りの筋トレに励むのも厳しいか、と荒れる空模様を見て考えていた時に声を

掛けられた。

彼女も帰宅部ではあったが、テスト対策で適当な空き教室を借りて机に向かう時以外で二人きりというのは案外珍しいことだった。ましてや今日は環の部屋である。

木造三階建て。歴史ある寮の最上階北端に位置する一室は、例えば天気が良くとも窓の外に裏山が迫って、年中ひっそりしていそうだった。建築時から想定されていたそうだが、各階に四室ずつ南北の角だけが一人部屋で、他は二人か人数合わせで三人部屋となっていた。個室は希望者が多く倍率も高いが、環は競争を勝ち抜いたのだろうか。

ちなみに、あたしが寮を出る前は南端の校舎側にある部屋を使っていた。当時は環と同じクラスだったので相部屋で構わなかったのだが（実際環はそれを希望した）、不良のあたしに感化される可能性を考慮し、高度に政治的な判断から残酷にも二人を引き裂いたのだ。

とは言え、一学期が終わる前に家が燃えて、葬式のごたごたが終わった頃には夏休みが来ていてそのままアパートに移り住んだため、個室にいたのは一瞬だった。

なお、前学年で相部屋だった少女は不幸なことにいつからか登校拒否、寮に引き籠もったと言うべきか……となってしまったこともあり、特例として二人部屋を一人で使用していた時期があった。優等生だった彼女の凋落^{ちようらく}ぶりについて、海月など一部の教師の間では同室のあたしを元凶とする説もあるが酷い濡れ衣だ。

絶対に食べられないようにと名前まで書いた冷蔵庫のプリンを勝手に食べたり、初めてのデートだというので余^よ所^そ行きのボーチにささやかな避妊具を仕込んだり、どうしようもなくムラムラして寝込みを襲ったことはあったが、すぐに思い出せるのはそのくらいだ。皆はくれぐれも悪質な風評を鵜呑みにしないように。

そんなこんなで、環の部屋にお邪魔するのは今回が初めてだった。

カップに口を付けつつ、窓の外、暴風雨に揺れる木々を彼女の頭越しにぼうつと眺める。この季節には珍しい霹靂^{へきれき}が遠くに響いて、電^{ひよう}でも降り出しそうな気配だ。

「しおりん、おいしくない？」

「ん、環が淹^いれてくれた茶がまずいわけではないって。これ、相当良い玉露^{ぎよ}だろ？」

「それ、アールグレイ」

「あーる……あんまり聞き慣れない銘柄だな。静岡も国際化の波には逆らえなかったか」

「だから、しおりん。それ紅茶だから」

「昆布茶^{こんぷちや}はあたしも好きだ。梅を入れると旨いんだよ、あるか？」

「いい加減怒るから」

変なことを言っただけはなかったが、適当に受け答えしていると機嫌を損ねてしまったようだ。な

るほど、女心と秋の空は移ろいやすいらしい。

「あー、もうすぐ十二月か。卒業まであと何年あんだよ、めんどくせえ」

「そろそろ期末テスト」

「おつ。またくらげちゃんの生理が激しくなるな。血染めのウエズデイだ」

「しおりんの下品なネタ、あんまり好きじゃない。あと、十二月はディセンバー」

「あたしでもそのくらいは知ってるつて。タコの脚が一二本だからだろ？」

「……………」

「……そんな本気で引くわみたいな顔すんなよ」

「しおりん、もしかしてバカ？」

「もしかしないだろうな」

冷めないうちにアールグレイとやらを飲み干し、カップをソーサーに置く。

外は稲光いなびかりがし始め、いよいよに雨脚が強まっていった。家に帰る途中で雷に打たれないだろうか、傘を

差さなければ落ちてこないだろうか。そんな心配をしてしまふ。

「そういうや、環は帰らなくていいのか……つて言うか、寮に暮らしてたんだな」

「すぐく今更」

「だってさ、昔は『パパ、パパ』つてそればかりだったろ。一人で寂しくないのかつて」

「土日は帰ってるから、大丈夫」

「そっか。親父さんは最近どんな感じ？ やっぱり現役びんびん？」

「……………」

「……そんな怒るなつて」

「そういう親父ギャグ、いつもびんびんのしおりんに言われたくない」

「ひでえ言われようだなオイ。それ言うなら環だつて」

「次言ったらしおびんつてと呼ぶから」

昔からスポーツブラを付けていたが、買ったその

日にパッドを紛失したのと成長して窮屈になったのとで、夏場は汗で張り付いたシャツ越しにも見えてしまうことがあった。それとは逆に、環は出会った頃から若干身長が伸びた程度で胸のサイズもミニマムを死守しているため、端からブラを着けていない。パンツは……さすがに穿いていると思う。

「しおびん、今やらしいことを考えてた」

「しおりんだから！」

環も梓も何故そこばかりピンポイントに責めてくるのか、推理するほどに謎が謎を呼ぶ。

「父さん、私がいけないと何もできないから。洗濯物も溜め込むし」

「ダメ親父だな、ってうちの親父もそんなに変わらなかつたけど。でもさ、そういうのは」

「……………」

「いや、ごめん。うっかりしてた」

「ううん。今のは別に、怒ってないから」

環にしては珍しく、あたしを励ますような微笑み。

彼女の父をだらしがないと言ったことを詫びたわけではない。あたしが言い掛けて引つ込めた、そういうのは母の仕事だ、という言葉についてだ。

環の両親は、彼女が物心付く前に離婚している。律儀な彼女にとって、幼い頃からべつたりで世話になった分、休みには家に帰って父の世話を焼くのが当然なのだろう。

「おっかさん役をしないといけないなんて、環も大変だな」

「私がしたいことだから。しおりんこそ、ずっと頑張ってる」

「べ、別に頑張ってるなんか……あたしも、その、やりたい放題やってるだけで」

「照れるしおりん、ちょっと可愛い」

「ううう、うるさいやい！」

環には、環にだけは、家族のことを話していた。

他人から同情されるのは嫌いだ——そう思ってたつもりもなかったのに、いつの間にか隅々まで知

られてしまっていた。どういう成り行きでそうなったかまでは覚えていない。本当は話したいのに話せる相手が他にいなかった、誘導尋問というやつに引つ掛かった、知らぬうちに薬を飲まされ自供していた……最後はないと思うが、考えられる可能性は幾つかある。

もしも知られてしまったら、あたしは距離を取るつもりでいた。ただ、それでも環との関係は変わらなかった。彼女が変えようとはしなかった。

たった今のような、頑張ってるね、大変だね、程度の慰めは言うかもしれない。けれども、そこから先へは踏み込んで来なかった。話して楽になれと言わんばかりに、根掘り葉掘り語らせようとする大人、伯父夫妻や海月とは異なっていた。

同情はしないが、出来るはずもないが、だれよりも理解を示してくれた……気がする。

尊重はするが指図はしないその姿勢を、ありがた無責任、と勝手に名付けている。

あたしにはこのくらいの甘さがちょうどいいのだと思うし、環の向けてくれるそんな眼差しが好きでもある。少し買い被りすぎだろうか。

図らずも、彼女があたしの部屋に土足で上がり込んだことは今^も以てない。良くも悪くも。

その一方。自分でも変な話だと思うが、干渉されたい、侵されたい気持ちには僅かにあった。何故なら、今の環はあたしのことを、少なくとも積極的には知ろうとしてくれないからだ。話したい時は話せばいい、私はそれを聞いている……故にありがた無責任なのだ。

不幸な生い立ちに対する共感是要らない。だが、あたし自身の趣味だったり、時々会話に出る粹のこ^とだったり、その他諸々に対しても環は一定の距離を保っている。

さながら、付き合いたての二人の間に流れる初々しさを守るように。

「環の親父さんって、普段は何してるんだ？」

ちよびつとの反抗心と好奇心。そちらがその気な
らと、試しにそんな質問を投げてみる。

環は特に躊躇うこともなく、大抵ポーカーフェイスなので内心は読み取れないものの——色にも変化は見られなかったが——あっさり答えた。

「父さんなら、いつもお山」

「この時期の芝刈りは大変だよな。で、環は川へ洗濯に」

「行かない。桃は流れてこない」

「うん、ごめん」

色を覗き見るのは罪悪感がある、親しい相手だからこそ自重すべきだ。ちなみに、今のボケを環が本気で面倒臭いと感じているのはびんびん感じた。繰り返すがしおびんではない。

「お山って、あのお山のことか？」

再び窓のほうを見遣りながらの問いに、環はこくこくと頷く。

お山というのは学園の裏にも見える、千メートル

近い連峰のそのまたどこかの頂にあるという屋敷も
とい社のこと。

明道寺。麓やこの近辺に住む者にとって、その前は少しばかり特殊な意味合いを持つ。

「そっか、明道寺か……なるほどな」

「しおりん、どうかした？」

「いや、別に？」

つい考え込むような顔をしたからか、環には気が取られてしまったようだった。

「昔、うちの親父になんか色々聞かされたのを思い出してさ。お山の鬼って言えば伝わるだろ」

「知ってる。私も父さんからよく聞いたから」

お山には鬼が住んでいる。怪談というか民話というか、その類の話が明道寺にはいくつもあった。総じて『迂闊^{うかつ}にお山には近付くな』という辺りに着地する、郷土の昔話。勿論言葉通りに信じているわけではなく……鬼という言葉を借りた寓話^{うたがわ}であることも察している。

子供の頃の道徳の時間、地域史として必ず取り上げられるような戦いと争いの物語。

今では石を投げる者などいないが、忌み嫌う者は山ほどいる、そういう存在が明道寺だった。先生から習わなくとも、あたしら世代の子供でも、お年寄りから一度は聞かされている。

「しおりんは、明道寺が嫌い？」

「そんなことないない、だってあたしには関係ないからな。じーさんばーさんはどうか知らないけど、大昔の話だろ？ ええと……ほら、廃藩置県がアレした」

「廃仏毀釈」

「あー、それそれ」

明道寺はかつて神宮寺であり、明治時代の……あれ、なんだっけ、アレだよアレ。その辺りの詳しい話は、きつとあたし以外のだれかがいつかどこかで説明してくれるだろう、多分。

要するに維新の頃、御上おかみの号令で御先祖様同士の

内輪揉めが起こり、大勢が死んだり死ななかつたりという動乱があった。お、なんかそれっぽくまとめた。

「でも、鬼の話だけはあたしは気になるな。やつぱつえーのかな？」

「しおりん、単純」

「強い奴と戦いたくなるのは女のサガだろ？」

「……多分強いけど、しおりんなら勝てるかも」

「オイ、今なんか露骨に『こういう話を始めた時のしおりんマジ鬱陶しいし正直興味ないし適当にお世辞言つて誤魔化そう』みたいな顔したな？」

「しおりん、バカなのに時々勘が良い」

冗談を言い合いつつも、あたしの心の中にはしこりがあつた。

明道寺の鬼、社に逆らう者を取つて食うように始末していたという異形いきようの話。初めてそれを聞いた、聞かされた日のことを思い出してしまふ。

あたしには関係ない話——本当にそうだろうか？

あの時、親父はどうしてあたしを叱ったのだろう。どうして「峯雲に関わるな」と怒鳴ったのだろう。思えば、両親に環のことを話したのはそれっきりで。今のあたしがどう生きようと、環にどう関わろうと、いなくなった彼らに制限されることはない。死人に口無しだ。とつくにあの世へ行った老人共の戯言を信じて、親の忠告に逆らうのは、どこか矛盾してもいたけれど。

「しおりん、まだ帰らなくてもいいの？」

環のそれに、話題を断ち切ろうとする意思をかくかに感じた。

あたしも疲れているらしい。

自慢の娘が突然男になりたいと言い出したら、同級生の女の子にキスされていたと知ったら、まともな親ならだれだって二人を引き離そうとする。

……でも、そんなにまともな親だったろうか。

まともに見えたのは、それが最初で最後ではなかっただろうか。

——そんなことより、環の父が明道寺寄りの人間だと、どうして親父は知っていた。

「……………」

ぞわりと、毛むくじやらの手に背中を撫でられるような錯覚。

やはり、あたしは疲れているらしい。

「……あー、あたしはいつも遅いからな。早く帰ったら逆に心配されるっつか」

「そう」

返事を聞いて、どこか安堵するように環は答えた。

これはその、例のやつか。もし良ければ泊まっていかない、なんていうお誘いフラグか。そもそもあたしを部屋に入れた以上、環だってその意味を分かっているはずもない。

南雲葉はだれもが知るケダモノだ。

「えっちなのはなしだから」

「えっちなおはなしならあたしも好きだ」

「帰って。すぐに」

「もうちょつといさせてくれよ！　あたしたち親友だろ？」

本心が顔に出ていたのか、釘を刺されたのも知らず食い付いて失敗した。

「そういうところがなければ、しおりんは好きなのに」

「あたしはどんな環でも好きだぜ？」

「しおりん、やめて」

満面の笑みで応えたが駄目らしい。失敗に失敗を重ねてしまった、減点二である。

「でもさ、環」

古い記憶が甦って感傷的になったのか、それとも久しく環の唇から届いたその響きに浮かされたからか。無意識に、彼女を問い詰めるような言葉を紡いでしまう。

「あたしは環が好きだよ。でも、環の好きはきっと違ってる。いや、あたしにはそれさえ分からないのかもな。環は何も教えてくれないから」

あの頃からずっと、環とは仲の良いお友達に違わなくて。

学芸会の日、緞帳どんちようの陰に隠れてキスをした。ほんの一瞬の出来事で、驚いて何も言えないあたしの手を引いて、環は舞台に連れ出した。劇が終わり、なんとなく気恥ずかしいままその日は別れて、そこで終わるはずだった。甘酸っぱい想い出として閉じ込めることも出来た。

“——しおりん！”

それまで南雲さんと呼んでいたくせに、次に教室で出会った環は別人だった。

白雪姫役の女の子ではない、峯雲環と出会った日。家で必死に練習してきたに違いない。小さな顔を真っ赤にして、不自然なほど力んだ強い語気で、彼女はあたしの名前を呼んだ。

学年が上がっても偶然同じクラスで、気が付くとあたしたちはいつも連つらんでいて。

二人は友達になり、そう呼べる存在は今もお互い

に唯一で。

二人は友達のまま、友達から、何年過ぎようと変わることもなく――。

初めてあたしは環の部屋に踏み込む。

彼女がだれにも開かなかった扉を強く叩く。

「あたしは環のことが知りたい」

今のままがこのままに続いていく。

どうしてかその未来に堪えきれなくなつて、いっそのこと壊したくなつて、彼女を試してしまう。

あたしは環と一体どうなりたいんだろう？

この先、どう変わっていきたいんだろう？

「今日のしおりん、なんだか変」

少しむすつとして、けれど期待した変化ではない顔で、適当にあしらわれる。

彼女とは何年経つても変わらない――そんな切なすぎる予感が胸をよぎつた。瞬間、心の中の彼女が彼女ではなくなつていく気がした。今までそこにあつた形が、音を立てて崩れて、確かめようと伸ば

した指先からもすり抜けていく気がした。

その時が来て痛いほどに思い知る。

あたしは環の特別になりたくて、あたしの特別はいつも環だったと。

「そろそろ帰るよ」

終わりから逃げ出したかった。

目の前の、曖昧な表情をした女の子と、これ以上見つめ合つていたくはなかった。

あたしが立ち上がるが早いか、一対のティーカップが耳障りな音を立てる。

「――でも、私」

テーブルに身を乗り出し、押し倒すような勢いで飛び込んでくるだれか。

あたしの部屋に土足で、挨拶もなく、上がり込んでくる存在。

熱に浮かされた彼女の瞳の中で、今にも泣き出しそうな少女の顔が揺れている。

失われつつあつた峯雲環が、あたしの中で形を取

り戻して、見たこともない何かに変容していく。期待と不安、興奮と恐怖、全てが緋い交ぜになった昂りに胸が張り裂けそう。

「しおりんとなら」

私、おかしくなってもいいから。

「っ!？」

目映い光が網膜を襲い、影が伸びた直後、裏山の杉に雷が落ちた。尻尾を踏まれた猫みたいに震え上がった、環はあたしの胴にしがみつく。

長い静寂はそれとも耳の錯覚だったのか。

鼓膜だけでなく心まで破れそうなショックに放心しながら。再び雨音の戻ってきた密室で、環と二人寄り添う。

「しおりん、さっきの」

「さっきの？」

「その……聞こえた？」

上目遣いに、恐る恐るという顔で彼女は訊く。

「聞こえたって何がだよ」

轟く雷鳴に掻き消されて聞こえるはずがなかった。彼女がその先を伝える前に雷は落ちていた。そもそもビビって何も覚えていない。

色々な言い訳が浮かんだが、それらは全て事実だったが、彼女を真似てしらばつくれた。

「私も、しおりんのことが好きだから。だから、怒らないで」

「ふん。別に怒ってねえし」

「怒ってる。すぐ怒ってる」

「怒ってない。それより急にどうしたんだよ、びっくりした」

「……それは、雷が」

「へー。環は雷が落ちるのを予知して、あたしを庇ってくれたんだな？」

かまととぶった態度にカチンと来て皮肉を言う
と、環は瞳をうるうるさせて震えていた。やばい可愛い……ではなく泣かせるわけにはいかない。

頭を撫でて慰めながら、抱き付いていたままの環



を引つ剥はがした。

「しおりん、帰るの？」

「おつ。まだあたしにいてほしいのか？ えっちなのがアリならいてもいいけど」

「帰って」

はいはいと二つ返事をして、今度こそ席を立った。

さつきとは違う意味で、環とこのまま同じ部屋にいたらどうにかなりそうで、そそくさと退散する。

空っぽの手提げを取りドアノブを引き、振り返ってさようならをするより先に。

「なんだよ。今度こそ怒るぞ」

環はびつたりと背中中に貼り付いて、ブレザーの裾を掴んできていた。

「しおりん、好き」

「そうじゃないだろ。さつき言おうとしたのは」

「……私も同じ。しおりんと同じ、好きだから」

「そっか。じゃあそれでいいや。あたしも好きだぞ環、愛してるぞ」

「しおりん、絶対性根しょうねが腐くさってる」

「うっせえ！」

自分のそれは、あたしのそれと同じだと環は言う。確かにあの時、そういう言葉を欲していた。環の中であたしが特別であってほしいと願った。

……そのはずなのに、なんだろうこの腑に落ちない感じは。宝くじで一等だと思ったら前後賞だったような、嬉しいはずなのに残念な、叫びたいほど焦れたい気持ちは。

環との仲は、前進したようできて後退したようでもある、とどのつまり変化なしにも思える。

熱いほどの体温、思いのほかしなやかな四肢と骨張った胸の感触、それとんだか良い匂い。

記憶に強く残るのは、一人環を想う時に思い返すのは、それくらい。

「しおりん、またね」

「また明日な」

照れた顔を見られまいと、背を向けたまま肩越し

に手を振って別れた。

なんとなく予想もしていたけれど。

それがあたしの、環の部屋を訪れた最初で最後の
日の出来事だった。